

複素系の哀歌

(第30回 / 05・11・27)

作・龍門 歩

在央は、カッターナイフを握りなおした。これまでの生の軌跡が消え去るか、膜間から解放されるか。考えながら与吉へにじり寄ってゆく。

「どっちも不可能たい」心の中を見透かして与吉が言った、「おいを満州へつれていかんか。うんにゃ、縄を解くだけでよか。そうすりゃ、なんもかんもうまくゆくぞ」

「なに言ってるのかわかんないけど」携帯電話を終えた婁巳が口を挟んだ、「でたらめ言うな」

「そうだ、騙されないぞ」と在央が息を弾ませた、「もう満州なんて所はないんだ。それも知らないで連れていけなんて、でたらめの証拠だ」

「事象についても、虚事象についても、それらの根拠の無さを顕在化も潜在化もしなかつたに、なにを弁解したって無駄よ」

そのときではなく、あのおときでもなく、与吉が厳かに大音声だいおんじょうで宣言した。

「いかにも私は予言者である！」

ビル群が震動して干渉し合ったため、大地の上下運動が増幅し、衝撃波を発生し河口の水をかき立てて海へと逆ポロロッカ……。

「核力よ、とぐるを巻け！ 重力よ、わだかまれ！」

宇宙を締め付ける大蛇がそうしたかもしれない。三人を乗せた屋形船は、流れ着いた発泡スチロールのかけらのように場嵐にもてあそばされるだろうか。

「私の首を切れ、そして銀の皿に首級を盛りつけよ」

「そうしたら、なにを予言してくれるの？ 予言者さん」

「予言してほしいことがあるのか？」与吉が、茶化すように尋ねた婁巳に問い返した。

「そうね……」婁巳は小さな目で雲を見上げて考えなかった、「ないわ。あなたはなにを予言したいの？」

与吉は目をつぶり、縛り付けているロープや柱に、野良着を剥ぎ取るように皮膚をこすりつけ、擦り傷をいっばいこしらえ、あちこちに血を滲ませた。そうしてから、カッと目を見開き、つぶやかなかつた。

「皇国は必ずや鬼畜米英を殲滅するであろう」

(つづく)